

中世ポルトガル語¹⁾における *-er* 型動詞の 過去分詞について

黒沢 直俊

(目次)

1. はじめに
2. 動詞の過去分詞の形成法
3. 中世語における古形 *-udo*
4. 史的解釈
5. 中世語における *-udo* と *-ido* の分布
6. *Cantigas de Santa Maria* における過去分詞の形式
7. 文献ごとの揺れと分析の可能性 — まとめにかえて

1. はじめに

ポルトガル語の動詞は、不変化の不定詞²⁾の語尾に従って、大きく 3つのグループに分類される。それぞれ語尾が *-ar*, *-er*, *-ir* に終わる第 1、第 2、第 3 変化動詞である。そのなかで数が多く、新語形成にも関わる生産的な形式は第 1 変化の *-ar* 型動詞で、語彙の頻度統計をもとに母集団を取り、調べると全動詞の 6 割強を占める。そして、その残りの 6 割強が第 2 変化動詞の *-er* 型になる。逆に、動詞ひとつひとつについてみると、第 1、第 2、第 3 変化の順に、一般的には、個々の動詞の語彙頻度数は高くなると同時に形態的な不規則動詞が占める割合が増えてくる。ポルトガル語には、他に語尾が *-or* で終わる *pôr*「置く」や関連する *impor*「課す」、*supor*「推測する」など派生的な一連の動詞がある。これらは中世語では *poer* (<PONERE) で *-er* 型の第 2 変化の不規則動詞なので、変化のタイプ全体にはあまり関与しないと見なされているためか、文法では第 4 変化というグループは普通立てない。規則動詞は、第 1、第 2、第 3 変化の型に従って一定のパターンにそって時制や法の人称変化を行う動詞である。不規則動詞はそのパターンからはみ出るもので、変化形全体における不規則形の占める割合は動詞ごとに異なるので、ひとくちに不規則動詞と言っても、その不規則性はまちまちである³⁾。

ポルトガル語では規範的で標準的な書き言葉では、地域方言や社会方言に起因する形態的な変異形や、類推形成による異形は、ごく一部を除いてほとんど存在しない⁴⁾。ポルトガルのポ

ルトガル語は言語領域が比較的コンパクトで、歴史的な規範形成が十分に行われたことが関係していると見てよいだろう。

本稿の目的は -er 型の第2変化動詞に関して、中世語における過去分詞の形態的なバリエーションを調べ、動詞形態論の今後の更なる精密化を図るための一助とすることである。

2. 動詞の過去分詞の形成法

過去分詞⁵⁾の形成法から現代ポルトガル語の動詞を3つのグループに分けることができる。

①動詞の変化型に従い不定詞の語尾を規則的に置き換えて過去分詞を作るもの、②過去分詞が不規則である動詞、③規則形の過去分詞と不規則の過去分詞の2つ以上の過去分詞を有する動詞、の3つである。

① 規則的な過去分詞の形成法は以下である。

第1変化動詞 -ar → -ado (falar「話す」→ “falado”)

第2変化動詞 -er → -ido (vender「売る」→ “vendido”)

第3変化動詞 -ir → -ido (partir「発つ」→ “partido”)

② 不規則な過去分詞のみを有するのは次の8つの動詞である。(括弧内が過去分詞)

abrir「開く」 (aberto) cobrir「覆う」 (coberto) dizer「言う」 (dito)

escrever「書く」 (escrito) fazer「作る、する」 (feito) pôr「置く」 (posto)

ver「見える」 (visto) vir「来る」 (vindo)

③規則形と不規則形の2つ以上の過去分詞を持つ動詞⁶⁾

aceitar「受け入れる」→ aceitado, aceite (pt), aceito (br)

afligir「苦しめる」→ afligido, aflito elegir「選ぶ」→ elegido, eleito

entregar「渡す」→ entregado, entregue fixar「固定する」→ fixado, fixo

frigir「炒める」→ frigido, frito ganhar「得る」→ ganhado, ganho

gastar「浪費する」→ gastado, gasto imprimir「印刷する」→ imprimido, impresso

libertar「開放する」→ libertado, liberto morrer「死ぬ」→ morrido, morto

prender「捕まえる」→ prendido, preso romper「破る」→ rompido, roto

surpreender「驚かす」→ sorprendido, surpresa tingir「染める」→ tingido, tinto

文法書では、規則形は *ter* や *haver* を助動詞にした完了形に、不規則形は受動態や分詞構文など形容詞的に用いられ、使い分けられると説明されているが、実際の用例ではそうなっ

いない。

3. 中世語における古形 **-udo**

中世ポルトガル語の第 2 変化動詞の過去分詞には **-udo** に終わる形があったことが知られている。15 世紀のテキストでは、**-udo** に終わる形と **-ido** に終わる形で変異を示すのが普通であるが、16 世紀になると **-udo** の形はあまり用いられなくなる。文献的には、**-udo** の最後の例は、劇作家 Gil Vicente の 1525 年から 26 年あたりに書かれたと推定されている戯曲 *Juiz da Beira* 『ベイラの裁判官』の *creçudo* (*crecer* 「成長する」の過去分詞、現代語では *crescer* となる) である。Ferreira 1987^A (p.430) によれば、1280 年前後に成立した *Foro Real* 『地域法』のテキストでは、**-er** 型の動詞の過去分詞はすべて **-udo** または **-odo** (**-udo** 型のバリエーション) で、**-ido** による形はひとつも見られないという⁷⁾。キリスト教文献の *Dialógos de S.Gregório* 『聖グレゴリウスの対話』の中世ポルトガル語テキストの 14 世紀の写本で伝承されているものでも、**-er** 型の動詞の過去分詞はすべて **-udo** であるという。Ferreira 1980 (p.XXXIX) は 14 世紀 (前半?) あたりに比定される教会法文献である *Primeyra Partida* 『第一教会法』についても、**-er** 型の動詞の過去分詞はすべて **-udo** であるとし、ほぼ同時代に成立したテキストとされる Duarte 王の *Leal Conselheiro* 『忠実なる助言者』⁸⁾ では、逆に *creer*, *teer* とその複合動詞を除き、**-er** 型の動詞の過去分詞はすべて **-ido** であるという事実を指摘している。

4. 史的解釈

Williams 1938 をはじめとする標準的なポルトガル語の歴史文法書では、**-er** 動詞の規則的な過去分詞は、古い時代は **-udo** で、この形が 16 世紀までに **-ido** に置き換えられたと考えている。Williams 1938 (p.185) はラテン語から現代ポルトガル語までの語尾の変化を次のように示している。

	Classical Latin		Vulgar Latin		Old Portuguese		Modern Portuguese
1 st Conjugation	-ātum	→	-ātum		-ado		-ado
2 nd Conjugation	-ētum	↘					
		↗	-ūtum		-udo		-ido
3 rd Conjugation	-ītum	↗					
4 th Conjugation	-ītum	→	-ītum		-ido		-ido

(Williams 1938, p.185)

これは、特に古い時代の文献では -udo 型が圧倒的であるとする事実に基づくものである。しかし、-ido による形も、必ずしも数は多くないにしても13世紀の古文書文献や文学テキストに見られる。はっきりと、起源や規則性について言及したとは言えないが、Lausberg 1972, p.265 や Lloyd 1987, p.313 はスペイン語やポルトガル語の -udo はピレネー山脈の向こう側の影響⁹⁾であるとしている。

このテーマを扱った最近の研究に Cardeira 2005 がある¹⁰⁾。それによれば (p.215)、1350年から1450年にかけて文献に現れる -udo と -ido の生起を統計的に処理すると、全国的には1400から1425年にかけての時期に両者が拮抗したと見なされる段階があり、さらに南北の地域別に調べると、北部では1425年前後、南部では1375年から1400年にかけての時期に2つの語形の現れが等しくなる段階があるという。彼女の研究は、個々の動詞ごとのバリエーションの分布は考慮せず、-udo と -ido による語形全体を包括的に扱っている。動詞全体の中に占める -ir 型の動詞の数が少ないことや、この研究の時期的な出発点となる時代において -er 型の動詞の -ido 型の過去分詞が極端に少ないこと、比較的時代を下っても一貫して -udo 型の過去分詞を用い続け、かつ語彙の頻度が非常に高い *teer* (*ter*) やその複合動詞を対象から除いていることで、過去分詞の交替という点にしばって言語変化の実体を全体としてうまく捉えたものと言える。しかし、-er 型の動詞の規則的過去分詞が -udo 型なのか、さらには、この型の動詞に対して、はたして「規則的」過去分詞というものを考えることができるのかという根源的な問いには、個々の動詞が示す過去分詞の形態的揺れについて文献別時代別に見ていかないとよく分からない。

5. 中世語における -udo と -ido の分布

リスボン新大学の言語学研究所¹¹⁾を中心に進行中のプロジェクトとして中世ポルトガル語電子コーパス Corpus Informatizado do Português Medieval (CIPM)¹²⁾ がある。これは13世紀から16世紀の主要なポルトガル語文献を電子化¹³⁾したもので、そのプロジェクトのなかに中世ポルトガル語動詞辞典 *Dicionário de Verbos do Português Medieval*¹⁴⁾ がある。

中世ポルトガル語動詞辞典には、878語の動詞が収録され、内訳は -ar 動詞が636語、-er 動詞が181語、-ir 動詞が58語、-or 動詞が3語で、-er 動詞で過去分詞の形を示しているのは112語である。

この112語の -er 型動詞を過去分詞の規則的・不規則的、そして規則的な形については-udo型・-ido型という点から分類し、まとめると以下のようになる。

① 過去分詞は不規則形のみ (17 動詞) :

absolver (absolto...), afazer (affeytos), antedizer (antedicta), aprender²(apreso, apessos...),
benzer (beento...), colher (colleyto...), contradizer (contradito...), desaprender (desapreso),
desdizer (desdicto...), desfazer (desfeyto...), dizer (dicto...), entredizer (entredicto...),
envolver (envolto...), escrever (escripto...), fazer(feyto...), maldizer (maldicto...), satisfazer
(satysfeito...)

② -udo 型の過去分詞と不規則形 (2 動詞) :

esleger (22/11)(esleudo.../ eslleyto...), ver (21/25)(veudo.../ visto...)

*括弧の中は (-udo の生起数 / 不規則形の生起数)

③ -ido 型の過去分詞と不規則形 (7 動詞) :

eleger (emlegido.../ enleito...), escolher (escolhido.../ escolleyto...), nascer (nascido.../
nado...), querer (quirida / quisto), romper (rompidas / roto...), tolher (tolhidos / tolhejto...),
trazer (treitos/ tragido...)

④ -udo 型と-ido 型の過去分詞と不規則形 (6 動詞) :

acender (4/2/26)(açendudo.../ acendidos / aceso...), aprender¹ (1/7/21)(aprendudo /
aprendido.../ apres...), corromper (4/10/44)(corrõpudo.../ corrompida.../ corrupto), defender
(31/48/18)(deffendodo.../ defemdido.../ deffeso), despender (3/2/13)(despenduso.../
despendido / desspeso...), viver (1/2/176)(viuudo.../ viuido... / uiuo...)

*括弧の中は (-udo の生起数 / -ido の生起数 / 不規則形の生起数)

⑤ -udo 型の過去分詞のみ (14 動詞) :

absorver (3), acaecer (2), aparecer (5), bater (1), decaer (1), descender (1), **det**er (10)(
detinēre), jazer (1), **man**ter (14)(< mantenēre), merger (4), morder (2), **re**ter (20)(< retinēre),
soestabelecer (1), **sost**er (4) (< sustinēre)

*括弧の中は (-udo の生起数)

⑥ -ido 型の過去分詞のみ (23 動詞) :

abater, absconder, acolher, acontecer, ader, adormecer, agradecer, antremeter, apodrecer,
compreender, conceder, doer, endurecer, esclarecer, escorrer, falecer, guarnecer, obedecer,
padecer, repender-se, reprender, responder, tanger

(NB. doer < dolēre, responder < respondēre)

⑦ -udo 型と-ido 型の過去分詞（43動詞）

acorrer (9/15), aperceber (7/4), apremier (7/6), asconder (19/5), atender (1/2), avorrecer (2/8), beber (3/6), cingir (1/4), combater (2/9), comer (1/6), cometer (2/4), conceber (5/37), constranger (13/36), **conter** (84/2)*, converter (6/8), creer (21/10), crescer (5/11), derreter (3/2), desconhecer (5/9), **dever** (3/97)*, ěader(2/10), esconder (3/26), esquecer (1/16), estabelecer (18/59), haver (20/24), ler (8/3), mercer (1/4), meter (32/10), oferecer (3/14), parecer (2/1), prometer (25/31), prover (11/5), receber (62/69), remover (1/31), render (2/3), retraer (4/1), saber (60/7), ser (6/1) (< sedēre),(tecer (1/12), temer (7/10) (< timēre), **ter** (166/2)(< tenēre), vencer (25/54), vender (22/7)

*括弧の中は (-udo の生起数 / -ido の生起数)

このコーパスではテキストが13世紀から16世紀までにおよび、また -udo → -ido への交替が進行また完了している段階のテキストも混在するが、次のような点を指摘することができる：(1) deter, manter, reter, soster, conter, dever, ter などラテン語の第2変化動詞に属するものは比較的安定して -udo 型の過去分詞を示す、(2) -er 型の動詞には過去分詞が不規則のものが多(①のグループ)、(3) ⑥の -ido 型のみ(の)過去分詞を示す動詞はコーパスを広げていくと④または⑦のタイプに収斂されていく可能性がある。また、それとは対照的に、動詞辞典の -ir 型の動詞を見ていくと、そのなかにも -udo 型の過去分詞を示すもの¹⁵⁾があり、動詞の変化タイプのあいだで不安定なグループが存在することが窺われる。

次に、CIPM の動詞辞典にカウントされている語形を別の角度から見てみると、-er 動詞で -udo 型の過去分詞は771例(生起数)あるが、出典のかなりが特定の文献に偏っている。228例が *Cantigas de Santa Maria* 『聖母マリア賛歌』と呼ばれるスペインのアルフォンソ十世による宗教詩からであり、181例は、前述の Ferreira のエディションが存在する、*Foro Real*、86例が、同じく Ferreira の *Primeyra Partida* からである。後の2つの文献では、-er 型の動詞の過去分詞はすべて -udo 型であることが分かっている。

6. *Cantigas de Santa Maria* における過去分詞の形式

Cantigas de Santa Maria には -er 型の動詞は182語現れ、うち63語が過去分詞の形で現れている¹⁶⁾。過去分詞の現れ方のタイプによって動詞を分類すると以下のようになる。

- ① 不規則な過去分詞のみを示す：11動詞
- ② -udo 型の過去分詞と不規則の過去分詞：2動詞

- ③ -udo 型の過去分詞のみを示す：4 7 動詞
- ④ -udo 型の過去分詞と-ido 型の過去分詞を示す：1 動詞 arder (arduda 1 / ardidio 4)
- ⑤ -ido 型の過去分詞のみを示す：1 動詞 esmor(r)ecer (esmorido 1, esmorrido 1)
- ⑥ -ido 型の過去分詞と不規則の過去分詞：1 動詞 toller (tolleito 2, tolleita 2, tollido 1)

-er 型の動詞は、圧倒的に、-udo 型の過去分詞を示すが、arder のように交替を示すものや、esmorrecer や toller など -ido 型の過去分詞を示すものがある。-ido による形が、かなり古い段階からあることは否定できないし¹⁷⁾、arder などは第3変化のタイプとのあいだで揺れているとは考えにくい。他方、-ir 型の動詞も7 6語あり、うち1 7語に過去分詞が現れているが、そのうち3つの動詞が -udo 型の過去分詞をも示すという興味深い現象がある：decebir (decebudo 2, decebuda 1)(<decipere)、remiir (reemudo 1, remiir 2, remiir 4)、repentir (repentuda 2, repentido 1, repentir 4)(<Late Latin repaenitēre ← paenitēre) である。

7. 文献ごとの揺れと分析の可能性 — まとめにかえて

最後に、CIPM の動詞辞典はコーパスの語形を網羅的に収録したものではないので、テキストごとに以下のものについて過去分詞の語形について調べてみた。

- ① *Foro Real* 1 3 世紀 (1280?)
- ② *Foros de Garvão* 1 3 から 1 4 世紀 (1280? ?)
- ③ *Dos Costumes de Santarém* 1 3 から 1 4 世紀 (1294 / 1340-1360)
- ④ *Afonso X. Primeyra Partida* 1 4 世紀 (ca. 1350)
- ⑤ *Crónica Geral de Espanha de 1344* 1 4 世紀
- ⑥ *Vidas de Santos de um Manuscrito Alcobacense* 1 3 から 1 4 世紀 (写本は 1 5 世紀)
- ⑦ *Demanda do Santo Graal* 1 5 世紀
- ⑧ *Castelo Perigoso* 1 5 世紀
- ⑨ *História dos Reis de Portugal in Crónica Geral de Espanha de 1344* 1 5 世紀
- ⑩ *Leal Conselheiro* 1 5 世紀 (1428-38)
- ⑪ *Orto do Esposo* 1 5 世紀

ここでは、個々の語形の詳細について検討することは行わないが、総じて、これらのテキストのうち①から④まででは、過去分詞の形態は基本的には安定していて、-er 型の動詞では -udo 型になる¹⁸⁾。⑤から⑪までのテキストになると -er 型の動詞の過去分詞には、-udo 型ともに -ido 型の語形が現れてくる。これらは、時代が少し下がり、地域的にも南に偏ってくる。しか

し、個々の動詞ごとに語形の現れ方は異なるから、テキストごとに詳細な分析を加えたものを重ね合わせるように分析することを通じてしか全体像は見えないのではないかと考えられる。

試験的に、⑪の *Orto do Esposo* 『夫の庭』¹⁹⁾ について動詞と過去分詞の関係を、語形のバリエーションと -er, -ir という動詞の変化型の関係から表にしてみた。中世語には -er 型と -ir 型の変化タイプの間で揺れている動詞が多くあったことが考えられる。スペイン語、ポルトガル語、アストゥリアス語のあいだで、-er 型と -ir 型の変化タイプの分布が異なる動詞は少なくない。文献では、不定詞が現れないことも多いから変化タイプを確認できないこともある。今後、このような観点から、分析を精密化することが必要ではないか。

Distribution of -udo and -ido forms for -er and -ir verbs in the *Orto do Esposo*

	-er	? -er or -ir ?	-ir
-udo 71	stremer 5 hauer 4 comer 5 creer 1 deuer 5 emeder 1 ler 5 receber 3 veiser 3 sosiecer 1 souerter 2 teer 16 teuer 1 (52)	absoruer 3 apreuer 7 ← nuerter 2 moer 3 opreuer 1 penreuer 1 preuer 2 (19)	
-udo / -ido (26 / 60)	absconder (esconder)(1/26) comuerter (1/2) crecer (2/1) deurecer (2/3) outconder (2/1) meter (2/4) perceber (1/6) resoluuer (1/1) saber (6/2) us-ecer (8/14) (25/55)	confundir (1/5)	
-ido 256	aduer 1 arder 10 moerter 1 bouer 1 cometer 2 conceber 10 conuecer 18 contper 9 constranger 5 conuerger 1 conuencer 1 esparger 10 esquecer 3 escuder 2 esuecer 1 mouer 1 effuecer 1 parcer 1 perder 7 prouerter 2 reducer 1 roger 2 requerer 1 stabalecer 1 tanger 2 tecer 3 trager 7 uander 2 (102)	aribuir 2→ cingir 1 condir 1 distribuir 1→ e-ender 1 finger ~ fingir 1 psuir 1 restrangir 1 (10)	comprir 27 uastir (distir)26 consumir 4 departir 8 destruir 1 escacuir 16 furir 13 fugir 1 hir 1 ungi 2r omir 6 paruir 9 perseguir 2ir pinir 1 sanir 23 (140)
	-udo : -ido = 77 : 157		
	-udo : -ido = 97 : 176		

→→ aduer, conuerger, conuencer, esparger, escuder, esuecer, reducer, roger, requerer, tanger... without -udo?

註

- 1) 古い時代のポルトガル語を示す言い方は必ずしも確立していない。リスボン大学を中心とする研究グループによる区分では、各段階の境界は流動的な面があるものの、初期の14世紀頃までのポルトガル語を古ポルトガル語 *português antigo*、その後から16世紀半ば近くまでを中期ポルトガル語 *português médio*、16世紀から18世紀あたりを古典ポルトガル語 *português clássico*、そこから現代までを現代ポルトガル語

português moderno とする。これは、以前に Leite de Vasconcelos (1858-1941) が、16 世紀半ばを境とし、古ポルトガル語 *português arcaico* と近代ポルトガル語 *português moderno* の二つに大きく区分したものを下位区分したものである。16 世紀に入ると形態論の分野で現代語との差がほとんどなくなることを考慮したのだが、その関係でポルトガル語学では、中世ポルトガル語 *português medieval* や古ポルトガル語、近代ポルトガル語といった用語の範囲が研究者のあいだで必ずしも一致しないことがある。本稿では、中世ポルトガル語は、16 世紀頃までのポルトガル語を指す用語として用いる。

- 2) ポルトガル語には辞書の見出し語になる引用形の不定詞の他に、人称変化し従属構造を表現する人称不定詞 *infinitivo pessoal* または準定詞 (故池上岑夫の用語法) と呼ばれる形態が存在する。人称不定詞は、定形動詞同様、人称と数に応じ 6 つに変化する。ポルトガル語の文法では、引用形の不定詞のことを非人称の不定詞 *infinitivo impessoal* と呼ぶことがある。
- 3) 学習書は書き言葉や綴りを基準に扱うので、音声的に言語構造としては規則的な形態変化も綴り字の交替をとまなう時は不規則動詞とされる (*agir* 「振るまう、行動する」: 直説法現在形 *ajo, ages, age...*)。
- 4) 綴り字に現れるレベルでは、一部の動詞、例えば *destruir* 「破壊する」の直説法現在形における *destróis ~ destruis* (2 人称単数)、*destrói ~ destrui* (3 人称単数)、*destroem ~ destruem* (3 人称複数) や動詞 *ir* 「行く」の直説法現在 1 人称複数形 *vamos* が北部諸方言地域で *imos* で実現することなどを挙げることが出来る。ただし、この *imos* は標準的な規範には採用されていない。音声レベルになると母音の音価が規範と異なって実現される例は多く知られている。標準語で形態的な変種が少ないのは、歴史的に長い時間をかけて規範形成を経た言語の特徴で、イベリア半島北部のガリシア語やアストゥリエス語には見られない。
- 5) 過去分詞は男性単数、男性複数、女性単数、女性複数の 4 つの形に変化する。現代語では完了形 (*ter* + 過去分詞、*haver* + 過去分詞) には男性単数の過去分詞のみが用いられるが、中世のポルトガル語では性数変化する例も見いだされる。
- 6) このリストは代表的な例を示したもので、網羅的ではない。このタイプの動詞は 8 語しかない②の不規則な過去分詞のみを有する動詞と異なり、固定集合ではない。さらに不規則形の過去分詞がポルトガルとブラジルで異なっていたり、文法書や辞書によって、異なった形が挙げられることもある。学習書によっては、*matar* 「殺す」の過去分詞として *matado, morto* が示されることもあるが、*morto* は語源的形態的には *morrer* 「死ぬ」の不規則な過去分詞である。*morrer* 「死ぬ」と *matar* 「殺す」は、意味的に対をなすので、分類に根拠がないわけではない。
- 7) さらに Ferreira 1987^A (p.430) は、この点でカステロ・ロドリゴ *Castelo Rodrigo* の *Foros* は対照的であると述べている。そこでは *-udo* に終わる形は *fududi[n]cul* という複合語に現れるのみで、*-er* 型のすべての動詞の過去分詞は *-ido* による形であるという事実を指摘した Lindley Cintra (1925-1991) の研究を引用している (Cintra 1959, p.435)。ただし、この *fududincul* (あるいは *fududinculo* の形もある) は、文字通り *fodudo in culo* として、*foder* の *-udo* 型の過去分詞と取ることもできるが、すでに *Foro* の規定のなかで罵り言葉として発した者に罰金をかける対象となっているくらいだから、すでに化石化した表現である可能性が高く、むしろラテン語の *FUTUTUS IN CULUM* からの形として、過去分詞の形態の議論とは関連づけられないほうがよいかもしれない。Cintra は、この地域の周辺の同時代の *Foro* では、*-udo* と *-ido* が混在する状況であることも述べている。カステロ・ロドリゴは、ポルトガル北東部のスペインとの国境付近の地域で、歴史的にはアストゥリエス・レオン語領域に属する。レオン語的言語特徴を示す 13 世紀の *Foro* が複数知られているが、Cintra によって、これらはポルトガル語原文をレオン語を母語とする写字生が筆写したことから生じたものであることが立証された。アストゥリエス語では、13 世紀の文献に *-udo* と *-ido* のバリエントは見られるものの、ポルトガル語のように圧倒的に *-udo* が規則的思わせる状況は見られないという (García Arias 2003, pp.282-283)。さらに方言的にも現代語では *-udo* による形は少ない。
- 8) 1428 年から 1438 年までの間に書かれたと考えられている (Castro 1998)。
- 9) “*Asp. apg. Partizipien auf -udo sind literarische Gallizisme.*” (Lausberg 1972, p.265)。Lausberg の指摘は広く引用され、*-er* 型動詞の規則的過去分詞は *-ido* であり、*-udo* は後から入ったものとする解釈とされるが、原文を厳密にその前後も含めて読み直してみると、直接に言及しているのは、当時 *-udo* が広く流布していたという事実で、語源的解釈ではないことに気づく。直接接触することを避けたのかもしれない。Lloyd の次の引用も同じである。“The number of Spanish and Portuguese *-udo* participles in twelfth century

and the early decades of the thirteenth century is quite small, even when we take into account the exiguous quantity of preserved texts. The extraordinary vitality they acquire toward the end of the thirteenth century can be due in no small measure to intensified contact with trans-Pyrenean dialects.” (Lloyd 1987, p.313).

Ralph Penny のこの問題に関する扱いは慎重である：“Already in Old Spanish, most descendants of *-ĒRE* and *-ĒRE* verbs had come to have weak participles, either by adopting the *-ido* ending inherited by *-ir* verbs (e.g. *metido*, *corrido*, *avido*, replacing respectively *MÍSSU*, *CÚRSU*, *HÁBITU*) or by adopting the ending *-udo* (< *ÚTU*) (e.g. *metudo*, *defendudo*, *vençudo*, replacing *MÍSSU*, *DEFÉNSU*, *VÍCTU*). The two endings *-ido* and *-udo* alternated freely in the participles of *-er* verbs during the thirteenth century, but thereafter *-udo* declines in frequency and does not survive into the modern period, leaving the field to *-ido*.” (Penny 1991, p.193)

- 10) Cardeira 2005 は、古ポルトガル語から古典ポルトガル語への移行段階にあたる中期ポルトガル語を対象に、重要な6つの特徴について文献上の推移を調査したものである。扱われているのは、①母音接続 *-eo*, *-ea*、②語末の *-ão*、③動詞の2人称複数変化語尾における *-d-* の脱落、④過去分詞 *-udo*, *-ido*、⑤ *-l* に終わる語の複数形、⑥所有詞の体系、である。
- 11) Centro de Linguística da Universidade Nova de Lisboa
- 12) <http://cipm.fcsh.unl.pt/>
- 13) オンラインで検索したり、ダウンロードして使うこともできる。しかし、電子化の元としたエディションにはやや時代遅れのものもあり、厳密な研究を行うためには写本にあたる必要がある。本稿は、パイロット的な予備調査なので、あえてそのまま CIPM のデータを使用した。
- 14) まだ未完成で、網羅的にコーパスを反映したものではないが、相当量の語形を蓄積しているので、全体像を見る参考とした。
- 15) *corrigir* (4/21), *remir* (1/5), *trair* (3/3)。括弧の中は (*-udo* の生起数 / *-ido* の生起数)。
- 16) Walter Mettmann のエディションに基づき調査した。
- 17) *-er* 動詞の *-ido* 型の過去分詞で、非常に古い段階のポルトガル語で知られているものに、ガリシアの13世紀半ばの詩人 Pero da Ponte の作品のなかでの *fodidos* (< *foder* "fuck") (B1626, V1160) がある。この作品を伝承する写本は16世紀のものであるが、この語形は行末にあり *maridos* と韻を踏んでいる。もちろん、*-udo* の形もあり、13世紀後半のカステイーリャまたはガリシアの詩人とされる Johan Vasquiz de Talaveira の作品には *foduda* (B1548) があり、こちらは *perduda* と韻を踏んでいる。韻律のとれないところでは *fodido* (B1330, V936) もある。
- 18) なかには現代語とタイプが異なる動詞もある。1294年の *Dos Costumes de Santarém* に *cenguda* が1例あるが、これは現代語の *cingir* にあたる語で当時の語形としては *cenger* が考えられる。ちなみに、同根語はガリシア語 *cinguir*、スペイン語 *ceñir*、カタロニア語 *cenyir*、アストゥリエス語 *ciñir* または *ceñir* である。他方、*-ido* 形が *-er* 型動詞にはないとされる④の Afonso X. *Primeyra Partida* には、*-ir* 型の動詞で、*-ido* 形と *-udo* 形の交替を示す *consumido*, *consumudo* が一例ある。
- 19) この作品は15世紀にポルトガル中南部地域で作成された宗教的・道徳文献である。

コーパス資料

Cantigas de Santa Maria. Editadas por Walter Mettmann. 2 vols. 1981. Vigo: Edicións Xerais de Galicia.

Cantigas d'escarnho e de mal dizer, dos cancioneiros medievais galego-portugueses. Edição crítica e vocabulário. M Rodrigues Lapa. 1995. Lisboa: Edição João Sá da Costa.

Lírica Profana Galego-Portuguesa. Corpus completo das cantigas medievais, con estudo biográfico, análise retórica e bibliografía específica. Volume I, II. Coordinado por Mercedes Brea. 1996. Santiago de Compostela: Centro Ramón Pinheiro.

Orto do Esposo. Volume I. Texto Crítico. Editado por Bertil Maler. 1956. Rio de Janeiro: Instituto Nacional do Livro.

Orto do Esposo. Volume III. Correções dos vols. I e II, estudo das fontes e do estado da língua, glossário, lista dos livros citados e índice geral. Bertil Maler. 1964. Stockholm: Almqvist & Wiksell.

参考文献

- Cardeira, Esperança (2005). *Entre o Português Antigo e o Português Clássico*. Lisboa : INIC.
- Castro, Maria Helena Lopes de (1998). *Leal Conselheiro de Dom Duarte*. Lisboa : INCM.
- Cintra, Luís F. Lindley (1959). *A linguagem dos foros de Castelo Rodrigo*. Lisboa : Centro de Estudos Filológicos.
- Ferreira, José de Azevedo (1980). *Afonso X Primeyra Partida Édition et Étude*. Braga : INIC.
- Ferreira, José de Azevedo (1987^A). *Afonso X Foro Real Volume I Edição e Estudo Linguístico*.
- Ferreira, José de Azevedo (1987^B). *Afonso X Foro Real Volume II Glossário*. Lisboa : INIC.
- García Arias, Xosé Lluís (2003) *Gramática Histórica de la Lengua Asturiana. Fonética, Fonología e Introducción a la Morfosintaxis Histórica. Segunda edición*. Uviéu : Academia de la Llingua Asturiana.
- Lausberg, Heinrich (1972). *Romanische Sprachwissenschaft III*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Lloyd, Paul M. (1987). *From Latin to Spanish. Vol. I: Historical Phonology and Morphology of the Spanish Language*. American Philosophical Society.
- Penny, Ralph (1991). *A History of the Spanish Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Williams, Edwin B. (1938). *From Latin to Portuguese. Historical Phonology and Morphology of the Portuguese Language*. 2nd editon (1962). Philadelphia : University of Pennsylvania Press.

As formas do particípio passado dos verbos na segunda conjugação no português medieval

KUROSAWA Naotoshi

Na antiga etapa da língua portuguesa a terminação regular do particípio passado dos verbos da segunda conjugação em *-er* foi em geral a forma terminada em *-udo*. Esta terminação em *-udo* foi substituída paulatinamente desde o tempo medieval para a época clássica pela forma atual em *-ido*. No entanto, quanto à distribuição desta terminação em *-udo* e essa substituição das formas do particípio passado em *-ido*, ainda existem vários pormenores para ser esclarecidos. Neste estudo, depois de fazer uma breve revisão sobre a interpretação etimológica das formas do particípio passado, fizemos, como uma introdução para seguir à análise, um levantamento provisório das referidas formas do particípio passado, baseando-se nas formas acolhidas no *Dicionário de Verbos do Português Medieval do Corpus Informatizado do Português Medieval* (CIPM), um projeto em andamento realizado pelo *Centro de Linguística da Universidade Nova de Lisboa*. A seguir, utilizando os corpos linguísticos fornecidos pelo referido CIPM e por outros estudos contemporâneos, temos feito uma tentativa de análise e revisão deste fenómeno e concluímos que, para esclarecer melhor esta diacronia da morfologia verbal, temos necessidade de prosseguir às análises individuais das formas em cada documento medieval e depois sobrepôr os resultados. Como a primeira etapa e como um exemplo deste tipo de tentativa, fizemos uma classificação dos verbos desde um ponto de vista das formas do particípio passado existentes numa obra medieval do século XV *Orto do Esposo*.